

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制

内部質保証推進IR委員会、全学評価委員会

(責任者名) 小池 茂子

(役職名) 学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況		<p>本プログラムは「AIと情報リテラシー」と「データサイエンス入門A」の二つの科目で構成されている。いずれも令和7年度に開設された科目であり、担当専任教員の着任に合わせて開講したため、履修者数は比較的少数にとどまっている。しかし、春学期と同一内容で開講される秋学期の「AIと情報リテラシー」の登録者数が2倍以上となっていることから、今後は履修率の向上が期待される。</p> <p>本学では、内部質保証推進IR委員会と全学評価委員会によるプログラムの自己点検・評価を実施する体制を整備している。教育支援課との情報共有により、履修登録状況や単位修得状況を正確に把握し、各年度における履修・修得状況の確認と分析を行うことができる。</p> <p>さらに、基礎総合教育部会およびAI・データサイエンス教育委員会を中心に、評価結果に基づく改善策を検討・実施し、進化させる体制を構築しており、プログラムの履修率向上と質的改善を継続的に図ることができる。</p>
学修成果		<p>本プログラム対象の授業では、Microsoft Teamsや授業ポータルサイト「UNIPA」で作成した授業用グループを活用し、各回の授業資料や課題を配布している。また、「チャット」機能を用いて学生と個別にやり取りを行い、課題を回収することで、提出状況や理解度を把握している。提出状況や理解度が芳しくない学生には、個別サポートを実施し、学修の定着を図っている。これにより、学生の理解度と到達目標の達成状況を確認しながら授業を進めることができる。</p> <p>また、教育支援課では「授業評価アンケート」の集計結果や成績評価の状況を分析し、基礎総合教育部会およびAI・データサイエンス教育委員会で構成される「プログラム改善体制」と連携しながら、次年度以降の授業改善を計画・実施できる。</p>
学生アンケート等を通じた学生の理解度		<p>毎学期、授業評価アンケートを実施しているが、対象は開講科目の一部であり、「AIと情報リテラシー」と「データサイエンス入門A」は令和7年度春学期の調査には含まれていなかった。ただし、令和7年度秋学期には「AIと情報リテラシー」が調査対象となり、今後は本プログラムを構成する2科目について継続的にアンケートを実施する予定である。</p> <p>授業評価アンケートでは、「教員の説明はわかりやすかった」「授業の難易度は自分に合っていた」「この授業には意欲的に取り組んだ」など、授業内容の理解度に関する質問を設定している。さらに自由記述欄を設けているため、学生の理解度や学修状況をより詳細に把握できる。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等の学生への推奨度		<p>大学総務課が実施する「授業評価アンケート」やIR室が実施する「大学生活に関するアンケート」には、後輩や他の学生への推奨度に関する質問項目は設けられていない。先に述べたとおり、本プログラムの科目は令和7年度の授業評価には含まれていなかったが、「授業評価アンケート」には「この授業には意欲的に取り組んだ」や「自由記述欄」などの質問項目があり、学生の知的関心や達成感を把握することができる。</p> <p>なお、令和9年度には本プログラムの2科目を必修科目とする予定であり、履修率の向上と学修意欲の定着が期待される。</p>
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況		<p>専任教員の着任に合わせて令和7年度に初めて開講したため、履修者数や履修率の具体的な目標は設定していなかったが、他の情報系科目の平均受講者数である20名程度を想定していた。特に「AIと情報リテラシー」は新設科目であり、従来の情報系科目と名称や内容が一部異なっていたため、周知が十分に行き届かず、履修者数は伸び悩んだ。</p> <p>本学は人文社会学系の大学であり、データサイエンスやAIに対して苦手意識を持つ学生が一定数存在すると考えられる。そのため、当該プログラムを学ぶ意義や授業内容を丁寧に説明し、学生の理解を深めることで、より多くの学生が興味を持ち履修するよう積極的に促していく。実際、春学期と同一内容で秋学期に開講した「AIと情報リテラシー」では、登録者数が倍増しており、履修率の向上が期待できる。なお、令和9年度には本プログラムの2科目を必修科目とする予定である。</p>

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点		
	教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<p>本プログラムは令和7年度入学生から開始したため、現時点では修了し卒業した学生はおらず、令和11年3月卒業生が初めての修了者となる予定である。</p> <p>今後は、就職支援部門と連携し、プログラム修了者の進路を継続的に把握するとともに、本学IR室が実施する「卒業生就職先アンケート」を通じて、企業からの評価を収集・分析し、プログラム改善に活用する。</p>
	産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<p>上で述べた、本学のIR室が実施する「卒業生就職先アンケート」には「本学の卒業生をご採用いただいた企業の方にお伺いします。本学の卒業生は、以下の能力が身についていると思われますか。」という設問があり、「数量的スキル」「情報リテラシー」「問題解決力」「これまでに得た知識・技能・態度等を総合的に活用し、課題を解決する」を評価してもらっているため、そのデータをもとに授業の改善ができる。</p>
	数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	<p>「AIと情報リテラシー」の授業は、講義と演習の二部構成で実施している。講義では、人文社会学系の学生に配慮し、AIの歴史や基本概念、文書生成AIや画像生成AIの仕組みを紹介している。また、AI分野の背景にある脳科学や神経心理学など「人間に関する科学」の話題を取り入れることで、興味や好奇心を喚起し、学修意欲を高める工夫を行っている。</p> <p>演習では、生成AIの活用方法とその可能性を具体的に示し、教育、福祉、ビジネス、行政、研究、日常生活、娯楽など多様な場面での応用事例を確認しながら、豊かな社会の構築におけるAIの役割を考える機会を提供している。</p> <p>「データサイエンス入門A」では、ExcelやRなどのデータ分析ツールを用い、実社会のデータや課題を取り上げることで、データ駆動社会が直面する問題を理解させるとともに、学生の身近なところで数理・データサイエンス・AIのスキルが必要であることに気づかせる工夫をしている。</p>
	<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>本学は人文社会学系であるため、AIやICT、数学の高度な専門内容を重視したカリキュラムの実施は困難である。そのため、本プログラムを構成する「AIと情報リテラシー」および「データサイエンス入門A」では、担当教員が作成した授業資料を配布し、授業テキストとして活用している。</p> <p>授業資料では、社会や企業で求められる基本的な知識とスキルの習得を目的とし、座学では身近な事例を多く取り上げ、定性的な説明を通じて数理・データサイエンス・AI分野の本質的な概念をわかりやすく解説している。演習資料では、パソコンやソフトの操作手順をステップごとに画像で示し、繰り返し学習することで自然に技能を習得できるよう工夫している。</p> <p>さらに、ラーニングセンターと情報センターによる支援体制を整備し、パソコン操作に不安を持つ学生へのサポートを充実させている。</p>